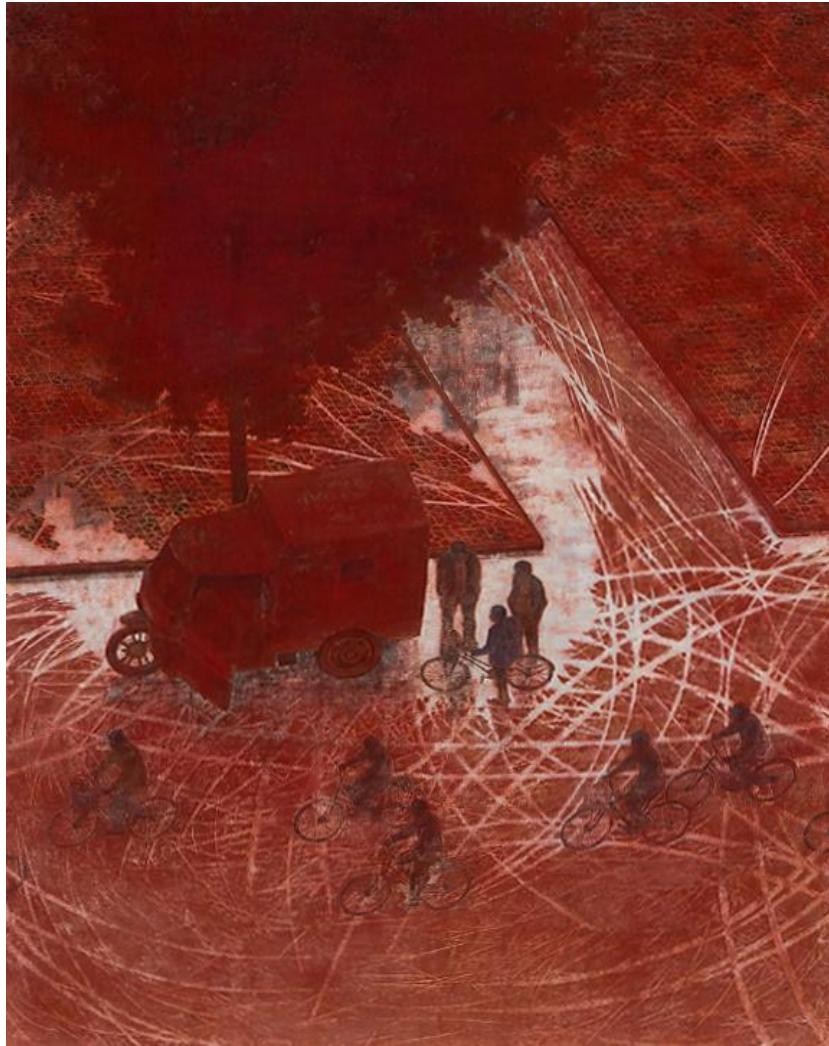




軌 轍 (きてつ)      2008 年制作   215×170cm   紙本着色・土佐麻紙・顔料・銀箔

中国へ旅行した際に、泊まっていたホテルの部屋から見えた風景です。もう通過してしまった人、今通過している人、通過する途中で立ち止まり話をしている人、これから通過する人によって描き重ねられるたくさんの轍の跡は、様々な時の交差の軌跡であり、人々の人生や交差の軌跡ともいえます。また偶然にも描かれた轍は、彼らにとっては人生の軌跡のほんの一部に過ぎませんが、これまで生きてきた紛れもない証しといえます。雨後の晴れ間に照らされた轍は、辿る道は違えどどの轍も明るい未来に向かっていく軌跡に思え、印象的な作品にしたいと長年温めていた題材でした。

取材をしてすぐに絵にしてみようと思うものと、それを描くための術が分からず、すぐには絵にはならないものというものがあります。この作品の場合は後者で、取材はもう十数年も前にしてあり、いつかは描いてみたいと思っていたものの、その感動・興奮をどうやって効果的に表現すればよいのか悩みの種でした。日本画という絵画技法は非常に奥深く、未だに材料のことを熟知して使いこなしていると思えることがありません。描く度に新たな発見と確信、思い通りにいかないもどかしさ、偶然に出来た効果に驚くということを繰り返して今に至っています。この作品も数々の失敗から思いがけない効果に辿りつき、この技法であれば思った通りの表現ができそうだと解決に至りました。画面全体を彩る赤色は辰砂という絵具で、その名の由来は中国湖南省の辰州という土地で採取される辰砂鉱が良質であったことからだといわれています。辰砂の名前の由来、中国に行けば必ず目にする赤い屋根の家々、また国旗の色も手伝ってか、中国の風景を赤で表現することは、自然に行きつく道だったように思います。